



田嶋 康利

労協連は、11月17～19日のソウルで開催された「グローバル社会的経済フォーラム及び協議体創立総会」に50人に近い訪問団で参加。それに引き続いて、同じ週の後半、11月22～23日福岡で「いま、『協同』が創る2104全国集会 in九州・沖縄」を開催した。今回で16回目となる全国協同集会は、日本労協連が呼びかけ、福岡県内のJA福岡、グリーンコープや福岡生協連などの協同組合、福岡県労福協、NPO団体、市民、研究者、大学生、自治体職員、マスコミ等幅広い方々の参加を得て実行委員会を結成し、「協同が創る」をキーワードに集会を企画、初日全体会に1,200人、2日目分科会に1,500人の方々に参加いただいた。

初日全体会では、朴元淳ソウル市長から連帯のメッセージが寄せられ、また韓国地域自活センター協会と日本労協連による「包括的協同協定」の締結式に70人に及ぶ韓国代表団が登壇する中、オ・サンウン会長と永戸理事長による調印が行われた。この協定は、4月に韓国に労協連訪問団から包括的な協同協定を呼びかけて以降、6月ソウル、8月福岡での協議を経て作成されたものであり、日韓の貧困や社会的排除を克服するための国の制度・政策の課題を踏まえて、市民や両組織がなにをなすべきか、また協同労働が果たす役割は何かを明記し、両組織の友好と連帯を市民連帯の立場で表明した内容になっている。

友好と連帯を誓い合うこの歴史的瞬間に

感動が広がる中、その場面を見た姜尚中さん(聖学院大学学長)が、急遽記念講演の内容を変えて講演に臨み、日韓の共通する厳しい情勢を踏まえて、「新しい生活の文化、スタイルを創造し、海を越えた連帯・協同で社会の軌道を大きく修正していこう」と呼びかけるなど、熱のある講演が参加者に感動と共感を広げるものとなった。

引き続き、農民作家の山下惣一さん、農と自然の研究所の宇根豊さん、ワーカーズコープ国分から仕事のできる子どもたちが登壇した「農と自然、つながる命」と題したパネルディスカッションは、人間は自然の一部であり、農に携わることで一人ひとりの生き方を考える場となり、またNPO抱樸「生笑一座」による自らのホームレス体験をベースに「生きてさえいれば」「助けてと言えた時から笑うことができる」との講演と「ひょっこりひょうたん島」の合唱には多くの感動の涙と笑いを誘った。最後は、未曾有の震災に見舞われながらも力を合わせ、心を寄せ合いながら復興に向かう石巻市長から復興に向けた取組み、ワーカーズコープ東北復興本部より3年にわたる活動が報告された。

翌日2日目分科会は、日本社会が抱える社会的課題別の21のテーマで分科会を開催、熱心な討議が行われた。

混迷する社会の底流には、市民の連帯・協同による社会の変革を求めるエネルギーが湧いてきている、そんな実感が広がる集

会となった。

韓国地域自活センター協会のオ・サンウン会長から、協同集会に参加しての感想をいただいたので紹介したい。

「夕暮れから夜明けにかけて福岡行きの飛行機に乗って急いで行ってきましたが、多くの余韻が残る貴重な時間となりました。もちろん滞在期間が短くて残念でしたが、集会での私たち韓国地域自活センター協会と日本労働者協同組合連合会との包括的協同協定締結式は感動的であり、続くセッションごとの討論会も良かったです。特に包括的協同協定は、単純な協定関係を越えて韓日両国間の民間レベルでの新しい動力を用意したと自負してもよさそうです。これは市場と無限の競争を越えて、相互互恵と協力という方法で協同社会経済の領域と地域住民共同体運動を拡大させるこ

とを両国が協力しよう、という下からの宣言だからこそです。特に、ビジネス的な協力を超え、私たちが取り組む社会的、経済的な活動の価値と哲学、そして最終的な住民共同体運動の方向性を明らかにし、さらにそれらを共有できたことはより一層意味深いものです。

これからは初心を大切に、実際に私たちが一緒に取り組む活動と課題についてともに考え、相談し、より持続的な活動をしていく必要があるでしょう。これまでの協定締結のために努めていただいた方々、特に今回の全国集会に招待していただき、おもてなししていただいた永戸祐三理事長をはじめ、国際連帯の実務チーム、役員全員に心から感謝の挨拶を申し上げます。ありがとうございました」。